

---

# 拾いもの陛下！

ひさなぼびー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

拾いもの陛下！

### 【Nコード】

N7823B

### 【作者名】

ひさなほぴー

### 【あらすじ】

春休みを利用して貧乏旅行をしていた大学生、結城なる實は道中でとんでもないものを拾ってしまう。まったく常識と言つもの知らないそいつに巻き込まれ、平凡だった彼女の旅路はてんてこまい。バカと無知のトンデモ珍道中！

## 帖之一：一樹の蔭

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。

沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。

奢れるものも久しからず、ただ春の世の夢の如し。

猛き人もついには滅びぬ。

ひとえに風の前の塵に同じ。

目前で繰り広げられる光景は、齡八つの少年にとってただただ衝撃的なものでしかなかった。

真つ赤な血しぶきを上げて事切れる男達。敗北を悟り自ら海へと身を投げる武者達。

それらはみな同胞だ。その一部は同胞という括りでは到底語ることの出来ない血族もいた。そんな彼らが目の前で死んでいく。

自然と身体が小刻みに震えた。それは武者震いなどではない、本当の恐怖。

彼は知っている。理性ではなく本能で、自分はこれから死ぬのだということ。自分が、狩られ屠られる側のものなのだ。

後ろから彼を優しく抱き締める母は、祖母は、この様をどのように眺めているのだろうか。そんなこと、当人にしかわからない。場合によっては、当人にも。

勝敗は決した。彼にはそこまでのことはわからなかったが、それでも雰囲気が語っていた。

絶頂を誇った赤き一族は、絶望から這い上がった白き一族に今滅ぼされたのだ。

母が、祖母が、そして女房たちが哀しみの声をあげる。

だがもはやどうにもならない。一度起こってしまったことを変えることなど誰にも出来ようはずがない。

やがて彼は祖母に抱かれ、紺碧の海へと沈んでいった。

「はぁー・・・やっぱし無謀だったわいなぁ・・・あ、このヒレカツウマー」

傍からはどう見られてるんだろうねえ、妙齡の女が一人でこんな寂れたトコでサンドイツチ類張ってる姿ってヤツは。

お天道様は超元気、吹き抜ける風は超爽やか。磯の香りも単純なあたしにや海の幸を思い起こさせてくれて食欲をそそる。こんな日にやカツカツな普段の生活を忘れて夢に向かってダッシュしたいってもんだ。まあ実際してるけどね！

あたしは結城ゆづきなる實み。仲のいい子たちにやーなるって呼ばれてる。こんな風にしか喋れないもんだから色々勘違いされそうだけど、これでもれっきとした乙女さ。

あ、今信じられないって顔したる。まあいいさ、そんなのどうせ慣れちまってるしさ。でも、今が旬な十九歳ってことは言っとくよ。これはマジな話。

そんなあたしが今いるのは、瀬戸内海の大パノラマビューが独占できる　ってーのはちと言いすぎかもだけど、ま、そんな感じの海岸線沿い。正確には、そこにあるコンビニ　ただし11時間営業　の駐車場だ。そこでサンドイツチ片手に海を眺めてるってなわけよ。

ムードないって話は受け付けないぞ。あたしだってどうせなら彼氏とでも来たいもんだがね、我が相棒ときたらこのチープな　とは言ってもあたしにとっちゃ超高価　折りたたみ自転車と来たもんだ。

「・・・ふいー、満腹ー。ごっつおさまっと」

ゴミを袋に押し込んで、立ち上がる。んでもってそのまま袋兼ゴミをゴミ箱に放り込んであたしは大きくのびをした。

「お腹も満ち足りたことだし、そろそろ出発しますかねー」

そいやっ、と気合を入れてあたしは愛車にまたがった。そのまま流れるようにあたしはその場を後にする。

街道沿いを愛車で走っていると、さっきにもまして風があたしを撫でていく。どっちかってゆーと叩かれてる気がしないでもないけど気にしない。

すぐ隣はわりと大きな車道なんだけど、滅多に車は通らない。通ったとしてもそいつあよっぼどの暇人くらいのもんだろう。そしてすぐ反対側は紺碧の海だ。あー、なんて綺麗なんだろうか。満腹ってこともあつてか自然と口笛なんか吹いてたりする。

なんてやつてると、すぐ隣をでけえトラックが走り抜けていった。当然あたしは風に煽られてバランスを崩す。ただバランスを崩しただけでなく、盛大に落下防止らしいコンクリートにぶつかって、拳句愛車の速度はすぐには落ちないので身体の右半分がすりむけた。マジで死ぬばいいのに。

「ちつくしよー、か弱い乙女が一人でいるんだからもう少しスピード落とせっつーにー」

毒づきながら後ろに振り返り、戻って自分の右側に眼をやる。あーあー、柔肌に傷が・・・ってほどでもないけど、こりゃトーシロにや繕えないレベルだ。いや、もちろん服がよ？

「まあいいか、今日はもう民宿まであと少しだし・・・」

溜め息をつきながらペダルにかけた足に力を込め・・・ようにして、視界に入ったあるものを見た。

「・・・なんだいありゃあ」

あたしの視線が釘付けになってるのは道路を超鈍足で疾駆するヤーさんなどではなく、紺碧の海に漂う、なんとというか一言で言うなら酷く場違いなジャパニズムカラー！

そいつを見た瞬間、あたしの脳裏によぎった言葉は十二単だった。でもそいつはそれとは違う。なんっつーかもうそんなレベルじゃない、そんな雰囲気をかもし出してた。んでもって、よくよく見て

みればそいつは中になんかを抱えてやがった。黒いのがくらげみたいにふわふわしてて、その中にあるのはどうもなまっちるい、丸い物体で、真ん中らへんにどうも口のような・・・口？

「・・・やっべえ！」

それを認識した瞬間、あたしは愛車と背中のリュックをその場に投げ出して飛び出した。コンクリートを飛び越えて砂浜に着地・・・つて、テトラポッド！あの懐かしい柔らかさは一体！もうこの国は終わりか？！

そんなことよか、いくら春とはいえ海に飛び込むのは厳しかった。水温冷たいよ！

それでもなんとかその海面を漂うジャパニズムカラーにたどり着くと、そいつを引っつかんで今度は中国大返しといわんばかりに即刻ターンをする。ただでさえ服着て泳ぎにくいもんだから泳ぎにくいことこの上なかつたけどこの際仕方ない。つてか、どこに上陸すればいいんだよ？！ちよ、誰だ最初に飛び込んだやつは？！

「・・・マジ死ねばいいのに・・・」

上陸地点からずぶぬれのまま遡ることおよそ五分、あたしは愛車の元に帰ってきた。放り投げられた愛車とリュックは人通りが少ないことが幸いしてか無事。無事じゃないのはあたし。リュックからなんかのためにと持っていたタオルを取り出して身体を拭くけどすぐにただの濡れタオルが誕生した。

「・・・ひとまず民宿に直行だな・・・」

問題は、このとんでもない漂着物である。

まじまじとそいつを見たのはこのときが初めてだったけど、そいつはまあ、うん、十二単みたく大時代な衣服であり、その中にいたのはいかにもジ・オールドジャパネスクなシロモノだった。なんとつか、まる？

でもそいつは少なくとも大人じゃなかった。いくら顔立ちが整ってたって、ガキにしか見えない。百万歩譲ってもこれで大人だって

んならあたしや首相に訴えるよ。

とはいえ今はこの子の安全を確保しにやらねえ。一応、辛うじて息はしてるんだ。でもすっげー弱弱しくって、なんっつーか虫の息。

何はともあれまずは民宿へ行く。今後の方針を決めて、あたしはその子の身体を冷やさないために抱きかかえて愛車にまたがり、民宿へ走る・・・寒い！濡れた身体で風を切るのすげえ寒い！死ぬ死ぬ！

・・・仕方ないので、歩くことにした。まったく、誰だよこんなことしたの。この国はもう終わりだ。

民宿に着いたときやもう日は暮れかかってた。歩くのとチャリとじゃあこつも違うもんかい。

あたしがずぶぬれでやってきたってことと、虫の息のガキンちよつれてきたってことで民宿のおっちゃんはずげえ慌てて風呂の用意とかしてくれた。洗濯機が一回分の運転を終えたころにあたしが風呂から上がったとき、おっちゃんはなんとかガキンちよを着せ替え終わったところだった。すまねえおっちゃん、この恩は忘れねえよ・・・！

なんだかんだでおっちゃんはこの辺に住んでて長いせいかこういう人間への対処ってもんをわきまえてて、あたしはぶっちゃんけ特にするのがなかった。仕方がないので、あたしをこんな目に合わせたこのガキンちよを観察することにした。

十歳は行ってなさそう、つてのがあたしの推測。着替えがぶかぶかで小さく見えるつてもあるかもしれないけど、まあどうあがいたつて一桁だろうよ。んで綺麗になったお顔は、まあよく言う天使の寝顔ってヤツ？罪のない寝顔してくれちゃってまあ。

あとこれくらいの子供って見分けつけづらいけど、こいつ髪結構長いから余計わからねえ。何がって性別。着替えさせたおっちゃん

曰く、こいつは男の子らしい。中性的だねえ、若いつていいねえ。

その日はそんな感じでドタバタと過ぎていった。そいつは目覚める気配がなかったし、疲れてたから結局あたしはすぐにリタイア。次の日目覚めてみたらずっとおっちゃんが見てたらしかつたんだけど、それはまだ今日の段階じゃわかるはずもない。

わかるはずもないといえ、このとき 正確にはこの後もずつとなんだけど、あたしたちはミスを犯してた。きつと二人ともテンパってたんだな。さつさと救急車呼べばいいものをなんで自分たちで抱え込んでうだうだしてたんだかわからねえ。まあそんなこと考えてもしょうがないし、軽っちいけどあたしは一種の定めってことにしておいた。そうでもしないとやってらんねえのさ。

## 帖之二：嵐の前の静けさ

コケツコツコー。もしくはコックアードウルドウルドゥー。

ドやかましいニワトリの鳴き声であたしは目が覚めた。ここつてニワトリも飼ってたんか？もそもぞと布団から身を起こしてふと柱を見れば、柱時計の小窓からニワトリがおはようさん。

ハトの代わりにニワトリか。どんなセンスしてやがる。誰やこげなもん買いいよったやつ。あたしが眉毛の繋がった警官だったら撃ち抜いてやるところだけどあいにくそんな公権ウエポンは一般人のあたしは所持が許されていない。

「おはようさんっす」

寝癖全開の頭をかきながらあたしはおっちゃんのいる部屋を通り過ぎる。

「おお起きたか。ちよっくら待つといてや、今朝飯の支度するけんそれまでこの子頼むわ」

うあ？とあたしが間抜けな顔を向けてる間におっちゃんはいそいそと台所へ向かう。その間抜けツラのままおっちゃんがいた部屋の中を覗いてみれば、昨日のガキンちよが昨日よりは血色のいいツラで静かに寝息を立てていやがった。

「・・・しまっつー、そいやあたしがキンちよ拾ったんだっけか」

ぼふんと自分の頭を叩き、そのまま手を顔から首まで滑らせる。

「しょうがねえなあーったく・・・」

ぶつぶつ言いながらあたしはどっかとその場にあぐらをかいた。

しばらくそのままガキンちよを眺めてたけど、ヒマだったから匍匐でガキンちよの横までずりりと移動する。そのまま大きく伸びをして、あたしは腕立てを開始。

.....

.....ヒマだよッ!!

やめた。なんというか、虚しい。くそっ、矢部首相め、もっころ

くなまつりごとが出来ないのかッ？！

「・・・はあーあ。それにしても・・・」

「冗談はともかくとして、このガキんちよはどこをやつなんだろう。昨日はそこまで考えるだけの肉体的余裕がなかったけど、一晩眠つていざこうして見てみるとそもそもそこから始まるべきなんじゃねーだろうかとも思える。」

こやつめが着ていた服は、既に洗濯機によりクリーニング済みだ。あんな時代錯誤な服を洗濯機でガチに洗っていいものか今となつちや疑問だけでもう遅い。

そいでもって重要なのはそこじゃない。あの時代錯誤な服。ありやどう控えめに見たつて現代で普段着なわきやない。おまけに儀式でだつてあんなものを着るのは皇族の皆々様くらいなもん　ガキんちよが着てたのはそこまで豪華じゃなかったけどな　だろうよ。んじゃこのガキんちよはなにもん？

「・・・」

当人はこつちの気も知らず寝倒してやがる。いい身分だなこのやろう、蹴飛ばしてやろうか。

「なるちゃんよ、飯でけたで」

「うあつ、はいよー！」

物騒なことを考えてたらナイスなタイミングでおつちゃんが帰還した。王は必ず帰還するというのか。

「一応こつちまで運んで来たけんな」

「マシンでかm j d k」

確かに、よく見るまでもなくおつちゃんはお盆に皿をたくさん載せている。これは応ずるべきか否か・・・どーする、どーするよあたしッ！

「ほな食べよか」

「続きはウエブで・・・つてあれ？」

「なるちゃんの分はそつちやからな」

あたしが一人でアホやつてる間におつちゃんはすでに配膳を終え

ていた。不覚ッ！おっちゃん強シッ！あたしは負けを認め畳の上  
正座した。

改めて見てみると、食事は焼き魚にあさりの味噌汁にご飯とい  
う海沿いならではの雰囲気朝飯 納豆？ナニソレ食べ物？ だ。  
しかし一人暮らししてて買わないもんだから魚がなんなのかわか  
ないあたしザンギ。多分、アジだろうケド。

「それにしてもおっちゃん、もつとええ服ないねんの？」

味噌汁をすすりつつ横目でガキンちょを見てあたしは言う。そう、  
今のガキンちょが着てる 着せられてる のは、時代遅れ  
三十年くらいは前っぽい な服だ。おまけに、こいつのサイズと  
かみ合っていないもんだからガキンちょを着た服、みたいな感じにな  
っちまつてる。いやこれはこれで面白い光景だと思うけどな！

「知らんがなー。わいかて子育てとかもう何十年もしたらんし」

はい全くもってその通りでございます、反論する余地もございま  
せん。ってーか、むしろそんな昔の服を取ってあるほうが珍しいん  
だろうな。でもどっちにしてもないよりはマシ、ってレベルだけど。  
「そないに言うなら、なるちゃんが買ってきたったらええんとちゃ  
う？」

十二時の方角から追撃が来ました。

「あたしそこまでブルジョワとちやいますねん。ホンマに最低限の  
お金しか・・・」

「金の心配はええよ。わいが出したるさかい」

再び十二時の方角から追撃が来ました。かわしきれません！

「それやってんならまあ、ええかな・・・」

被弾。コントロールが利きません！不時着します！

朝一のデパートに並ぶとか、恐らくあたしの人生後にも先にも二  
度とないだろうと思うんだ。こんな・・・こんな・・・。

「はい、いらっしやいますー！」

店員の声と同時に店が開き、周囲のオバサン連中が一斉に中へとなだれ込む。

「ちよ、ま・・・」

こんな、混雑しまくってる状況にわざわざ自分から飛び込むなんて、絶対するもんか。

流されて婦人服売り場。オバサンどもがバーゲンセールという名の合戦を繰り広げる光景を尻目に、あたしはふらつきながらその場を離れる。おのれ、これは孔明の罠か？

「子供服売り場は三階、か・・・」

エレベーターの隣に張り出されている案内板で目的地を確認して早速エレベーターへ。乗り込む際にやつぱりオバサンの群れに捕まかけたがなんとか搭乗に成功。では大佐、これより敵地に潜入する。

さて、ここで一つ問題をぶっちゃけよう。何が？そりやもうそれは決まってる。

それは破壊的にあたしはファッションセンスがないということだ。シヤレにもならない。

そもそも外見なんて気になんないタチなもんだから、普段から周りの目を気にした服装をしたことがない。・・・ああ、まー小つせえ頃は親の買ってきた服を着てたりもしてたけどさ、もったいないから。

「・・・」

そんなわけで、写メに収めたガキンちよのツラから大体このあたりがいいんじゃないだろうかと思えるものを選んでいるつもりなんだけどそのチョイスにいまひとつ　　というかまったく自信が持てないわけで。

　　というかそれ以前に、あたしみたいなうら若き乙女が子供服売り場で子供を連れずに服を物色してるってのは周りにはどう思われてんだ？いや、昨今じゃ二十歳以下の若造が出産ってのも結構あるみたいだしそれは別にいいと思うけど。

「考えてもしょうがねーわな、この辺りでいつか」

結局あたしは考えるのをやめて、第一印象だけで服を上下下着あわせて二着選択。そのままレジへと直行する。しめて一万飛んで三百四十七円。

「あ、領収書ください」

「かしこまりました。それではお名前のほうをお願いいたします」

おっちゃんが金を出してくれるってことなんで一応領収書を頼んだはいいさ。いいけど、おっちゃんのフルネームがさっぱりわからん。どうしよう。。。。

「・・・遠山金四郎景元で」

店員は、素晴らしく胡散臭い顔であたしを見つめ返してくれた。

「アイムホーム」

「？ああおかえり」

最強を誇るおっちゃんも英語は通用しないみたいで、ヘンな顔された。生粋のジャパニーズだな。

袋をひっさげてあたしは帰還したわけなんだが、当のガキんちよはまだ寝てやがる。ん、まあ死んでないみたいだしそれはいいんだけどさ。。。

「おっちゃんよ、まだそいつ起きへんの？」

「起きんねえ」

起きないのかー。拾った手前心配にもなるってもんだ。まあでも普通に息だつてしてるし、顔色も悪くないし、大丈夫だよな、きつと。ってなわけで。

「んじゃとりあえず、そのダッサい服変えっから」

「ん？あ、あいよ」

ガサゴソと袋から買ってきたばかりの服を取り出すあたしを見ておっちゃんのはさみを取って渡してくれた。ちなみにおっちゃんにとってこの服は趣味に合わないらしく、一瞬すごく意外そうな顔を

した。んだよ、悪かったな。

「・・・ところで」

「あに？」

おっちゃんがかくつついてるタブを切り取るのに四苦八苦しるあたしに急に話しかけてきたもんだから、あたしは思わず間抜けな声で応えちまった。

「この状況で着せるってんか？」

「え、着せないの？」

「いや、寝てるやんか」

言われてみれば確かに。今のあたしは安らかに眠る子供の服を剥ごうとしてるいかがわしい女か。いやそんな趣味はないぞ、断じて！

「でも起きてからやと色々とめんどいやん」

というわけで、ガキンちよの服を剥ぐ。くそう白い柔肌しやがって、なんだそれは、自慢か？あたしに対するあてつけなのか？ちつくしょ、こうなったらまず先に全部脱がせてやる。全裸！全裸！

「・・・ごめんなさい調子乗りました。」

まずはパンツ。まあ一般的なブリーフなんだけど、そういや気づいたら同年代の連中はトランクスになつてた気がする。どれくらいから変わっていくんだろうねえ？素朴な疑問。

んでスボン、そいでもってランニングシャツ着せて上をかぶせて・・・と・・・。

「・・・お？」

上を着せたところで気がついた。

「・・・」

「・・・」

ガキンちよと、眼が合った。

「・・・」

「・・・」

せんせー！この子オキテマスヨ、イツカラディスカー！

「えーっと・・・」

あたしは愛想笑いを浮かべながらゆつくりとそいつから離れて正座した。それにあわせてそいつの視線があたしのほうに動く。なんだよ、あたしはそんな珍しい小動物か？

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

やな空気が周りに充満する。おっちゃんもどうすればいいのかわからないらしい。あたしはもつとわかんねーよ！

しょうがないので責任を取ろう。あたしはぼんやりと上半身を起こしてるそいつに体当たりの質問を仕掛けることにした。

「よう、お目覚め。単刀直入だけんどもお前さんどこのどなた？」

そいつはあたしの声にびくっとして焦点の合わない目をこっちに向けたけど、すぐに視線が定まってあたしの顔を怪訝そうに覗き込んだ。んだよ、んなじーつと見つめるほどの価値なんざねーぞあたしや。っていうか、あたしの言葉わかる・・・よな？

「もっかい言んべ、お前さんどこのどいつよ？」

あたしその言葉にそいつは理解したのかしてないのか、見てわかるくらいにむすつとして胸を張ると、いかにもガキらしい抑揚のない調子のか声で高らかに宣言した。

「朕は当代天皇 言仁ことまことである！」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

えーつと。え、何？天皇？

そのあまりに破天荒な言葉に、あたしもおっちゃんも言葉が出なかってしばらくまたイヤな沈黙の空気が充満した。

### 帖之三：後悔先に立たず

「よしわかった、とりあえずもっかい聞かせていただきやすぜお坊ちゃん。あんたなにもん？」

わかったって言うてもワケワカメってのがわかったただけで別に細かいトコまで把握できたわけじゃない。というか、なんとというか余計わからなくなったつぼ。

「二度は言わぬ、朕は当代天皇、言仁じゃ！」

返答、依然変わりなく。

あー、なんか頭痛が痛くなってきた。こいつはあれか、ちよつちおつむがイつちやつてんのか？つってもどんだけラリってたって朕だのなんだのって普通知識にないと言わねえよなあ。ってーか、言仁つてめつちやマイナーな天皇だぞ。

「おーけ、わかった、とりあえずわかった。ちよつち待つてくんなおつちちゃんちよつと」

後ろでガキンちよがなんかわめいていたけどそれはひとまずシカトし、あたしはおつちちゃんを連れて部屋の外に出た。

「なるちゃん・・・なんなんやるなあの子」

音量は低。耳打ちするようにおつちちゃんがあたしに言うてくる。

「あたしに言われても知らんがな。でも言仁なんつー名前、おつちちゃん知ってつかい？」

「いや知らん」

ザ・即答。諦め早いなおつちちゃんよ。

「・・・だわなあ。・・・んだ、ちよつくら待つておくんままし」  
あたしはそこにおつちちゃんを残し、自分の部屋までかけ戻ってリユックから高校時代から愛用してる電子辞書を引つつかんで戻ってきた。

「あいさ、ここに取り出したるは文明の利器電子辞書」

「・・・何すんねん？」

「まあまあ・・・まずはとくにご覧あれ」

あたしは電子辞書を開き、メニューから日本史辞典を選択してキーボードのA、N、T、O、K、U、を順に叩いた。そして、そこに表示された項目を選択しておっちゃんへ見せつける。

「・・・と、まあそんなわけで・・・」

「ホンマかいな?!」

おっちゃんが驚くのも無理もないんだわさ。何せあたしが入力して選択した項目は、『安徳天皇』。そこに記されていた名前こそ、あのガキンちよが申し奉りなされた、言仁という名前なんだから。

辞書に載ってる情報は、まあよくよく学校で習うようなコトしか書いてやがらねえ、つまり日本人なら常識として知ってる　ハズな　情報ばかり。

「天皇としての称号はみんな結構知ってっけど、本人の名前なんて普通知らないじゃん?」

「そやなあ・・・大体今の天皇だってわい本名知らんし」

おっちゃんの意外な弱点を発見。歴史および時事な話題は苦手と見た。

「普通だつたらあれくらいのカキンちよって天皇の名前わからんと思っくんよね、あたしや」

「ってことはなるちゃんはウソはついてへんって?」

「ウソかどうかは知らん、その辺はさっぱりだわさ。けど本人本気なんは間違いないと思う」

「・・・うーん・・・」

おっちゃん、超疑ってます!っていうか、信じてねえだろ?・・・まあそりや当然っちゃ当然か・・・。

「まあなんだ、とりあえず対応はあたしやるから、おっちゃん飯でも用意しておくんまし。もしあやつがガチに安徳天皇だつてんなら、きつと現代の飯にやおっどろくぜー」

「・・・なるちゃん楽しんでへんか?」

「ぶっへっへ、バレた?」

「バレバレやわ。・・・まあわかったわ、子供でも食べられそうなの用意しとくわ」

「頼みますー」

台所のほうへ消えるおっちゃんを見送って、あたしはいそいそとガキんちよの待つ部屋の中へ戻った。

「・・・・・・」

まあなんだ。こーゆー展開はある意味予想できてはいたがここまでは。

「・・・おんどりやなにしとんねん！」

気づけばあたしはその辺に転がってた着替えさせる前の服をガキんちよめがけてぶん投げてた。それは興味深げにティッシュ箱からティッシュを取り出しまくってる不届き者めがけてまっすぐ飛んでいき、そのどたまに見事直撃した。

そしてそいつは華麗にバランスを崩し、畳に顔面から突っ込んだ。ずしゃっつーなんというかいかにもすりむけましたって感じの音が響く。

「・・・あ・・・」

しもうた。やっちゃまった。ついいつものクセでツツコンじまった。

「おいだいじよ」

「何をするのじゃ無礼者！」

心配したあたしがバカだった。そいつは鼻っ柱赤くして、涙目になりながらも食ってかかってきよった。

「そいつぁごめんなさいよ。けどそれは無闇に出したらあかんのよ、わかる？」

「これはなんじゃ？」

「テメエあたしのセリフ聞いてんのか？」

「・・・ティッシュだよ」

「て、てっしゅ？」

舌ったらずに可愛く発音してもあたしはだまされないぞ。

「ティッシュ。ティ・ッシュ」

「てい、しゅ？」

「ティ・ツシユ！」

「ていつしゅ？」

「おー、言えた言えた。それだそれ」

そいつが言えるようになったのであたしはそのままぐわしぐわしと頭をなでてやった。

「な、なにをする無礼者！」

「おっごめんよ」

なでられるのは好きじゃないのかそれとも単にそういうことをされたことがないのか、細かいところはわかんねえけどとにかくなんか嫌がったからあたしはなでるのをやめた。そしてじろりと睨まれる。

「んな怒らんでもよかんべさー」

やれやれって感じにあたしは両手をあげておどけて見せた。けどそれがいけなかったのかそいつは食ってかかってきやがったのだった。

「朕が誰かわかっての狼藉か?! そのほうはなんのつも」

「つつさいわ」

「ぎゃー!!!」

なんか話が長くなりそうだったから、あたしはひとまず黙らせることにした。食らえ袈裟固め。

「ぎゃー!!!ぎゃー!!!」

「ふははははは、泣け、喚け! その嘆きがあたしに力を与えるのだ」

「そいつがあまりに反応してくれたものだから、あたしは調子にのつちまった。」

「・・・なにしとんねん」

「・・・あや？」

気づけばおっちゃんがお盆に飯を載せたままこつちを唾然と見てるところだった。今のあたしの姿は無力な子供を虐待する鬼畜に見

えてることだろう。

「・・・まあなんだ。機嫌直してくれよう。このとーり、あたしが悪かったからさー」

あたしが土下座までしてるってーのに、そいつはおっちゃんが持ち込んだ料理をまじまじと眺めていやがる。ちくしょう、もつとあたしを見る！あたしの誠意を見れ！

「・・・これはなんじゃ？」

そいつはお盆　正しくはお膳とお盆のアイノコのような　に載った食事を指差しながらおっちゃんに聞いた。だからあたしを無視するなと！

「ご飯と味噌汁と焼き魚」

「・・・?」

おっちゃんのごくごくまっとうな返答に、そいつは頭の上に大量のハテナマークを浮かべて首をかしげた。どうやらマジでわからないらしい。

あたしは民俗系の話はわからないからなんとも言えやしないけど、多分平安って時代には白米も味噌汁もなかっただろうな！。焼き魚も多分ここまで完成したものはなかったんじゃないかなろうか。

「んつと・・・なんて言ったらええんかなあ」

ほっぺを人差し指でポリポリかきながらおっちゃんがあたしのほうを見た。眼が『ヘルプミー』って言っていた。よっしゃああたしにまかしとき！

「これがご飯な。米。多分あなたの時代とはモノが違うだろうけど根本は同じじゃわ。んでこれが味噌汁。危ないもんじゃないからまずは飲め。そいでもって焼き魚。これは見りゃーわかるわな」

あたしは横から顔を出して簡単な講釈をたれる。それでもそいつがわかったようなわかってないような顔をしてたもんだから、あたしはお椀と箸を取って飯粒を掴み取ってそいつの鼻先に突き出した。

「ほれ、食べ。心配すんな、どれも普通に食べっから！」

「じ、自分で食べられるっ！」

「まーまー、子供が遠慮すんなって、ほれほれ」

あたしは強引にぐいぐいと飯粒をそいつに押しつけ続ける。ここは根気の戦いだ！退いたら負けだ！

「……………」

いやいやそーにはあるけれど、そいつはおずおずと飯粒を挟む箸をぱくつとくわえた。そんでもってすぐにそこから離れてもぐもぐと咀嚼する。

「お味はいかがかなー？」

「……美味じゃ」

そいつは目を白黒させて口の中のものを飲み込んだ。そして心底驚いたってツラして配膳されてる面々を見やる。

「うまいかー、そーかそいつあよかつたんだぜー」

「箸は使えるやる？たーんと食いな」

そいつがうまいと言ったから、今日という日はご飯記念日。……んなわけあるかい！

とりあえずおっちゃんのお飯に満足してるみたいだから別にいつか。それでも半分くらい戦場だけ。

「あ」

あたしが見てる前でそいつは箸から魚の身を落とす。てめーあたしが全力で選んできた新品の服をいきなり汚すんじゃねー！

そいつがあまりにもお粗末な箸さばきを見せてきてきやがるものだから、あたしはガマンしきれなくなっってそいつからまたお椀と箸をぶんどって食わせることにする。

「あーんしなあーん」

「じ、自分で食べられると言っただろうっ！」

急にかっさらわれたからかさつきより怒ってる気がするんだぜー。けどそんなこと関係ないんだぜー。

「食べれてねーから言っただろーがよー。服とか汚されて尻拭いす



をゴミ箱にシユート。さつきのは外してたっぽい。そして今回のも  
ハズレ。あたしのノーコンめ。

「ここ、あんたから見たら未来の日本だからね」

そして振り返って続きを言う。

「・・・みらい？」

今、あたしの目にはこいつの後ろに『きよとん』ってでかかど  
書いてあるのが見えるぜ！

「んだ。未来。あんたは過去の人やで」

「そ、そんなこと・・・あるはずない、あるはずないっ！朕は戦に  
敗れて、それで、海に・・・！」

子供にやちーとばかり難しい話かもしれんなー。ってか、こいつ  
がガチで安徳天皇言仁を名乗るってんならわかるはずもないわな。  
それに最期、悲惨すぎるしなあ。

「『壇ノ浦』、つしょ？歴史の上じゃあんたは祖母と一緒に入水し  
て死んだってことになってる。諡号は安徳な」

「・・・っ！」

あたしの言った『壇ノ浦』って言葉にそいつはがばっとこっちに  
振り向いた。その顔はまるで昨日、海から引き上げたときみたく真  
つ青。

「まだ言っただげよーか？壇ノ浦の前には屋島と一ノ谷で戦があっ  
て・・・」

「もうよい！」

あたしの言葉を遮って、そいつは頭を抱えて伏せた。やっぱ、や  
りすぎたかな・・・。

「・・・えっと。ごめん」

「・・・」

やべえー、リアクションしなくなったー！

「遂にやっちゃまったな・・・わい知らんわ・・・」

ポンと肩を叩きそう言っておっちゃんはそのくさと立ち去ってい  
った。ちょ、この鬼畜ッ！

「……うえー……つと……」

ちらつとそいつを見れば、まだ轟沈したまま。これを引き上げるというのだね、ミスター？難しいことを言う……例えていうならそれは、バミューダ海域で沈没した数百年前の宝船を漁船だけでサルベージしろつてのと同じくらい難しい。いや、知らんけど。

「ん、な？あたしが悪かったよ、だからさ……」

「……」

ぐおおおお、やっぱしノーリアクションだよー！ヘルプ！誰かヘルプミー！この切実にどうしようもない状況を誰かなんとかしてヘルピング！

こうなつたら仕方がない、奥の手、またの名を伝家の宝刀！これは取っておきたかったが仕方がない。

「……陛下、全てにおいてあたしが悪うございました。この藤原なる實、心よりお詫び申し上げます」

そして頭を畳にこすりつける勢いで下げる。俗に言う土下座つてやつだ。……なんだよ、土下座のどこが悪いんだよ！心の底から謝ってるじゃん？！

……はっ、二度目だ！しまったあああ、効果ねええええ！！

「……今、藤原と申したか？」

そいつはあたしが土下座して謝ったということより、こつちのほうを通じるだろうと思って使った藤原の姓かほねに反応しやがった。だからあたしの誠意を見れと！

「……ん。姓は藤原、家名は結城。かつて栄耀栄華を誇った藤原一門の末裔でございます」

「……」

く、これでもまだダメか？！ならばリーサルウェポンだ！

「陛下が千年の時を越えてあたしの元へいらつしやつたのは何かのご縁……この藤原結城なる實、陛下の行幸にお供いたしましたしよう」

「……よいのか？」

おお、脈アリ！いいぞ、あと一押しだ！食らえトドメの一撃！

「現代における陛下の生活を、誠心誠意支えましょう」

「これでどうだあああ！！」

「・・・わかった。そこまで言うなら許す・・・」

「ごしごしと目をこすって、そいつはあたしのあたみに手をやった。くそ、確かに今は土下座してるけど！」

「・・・あんがとー」

許す宣言が出たので、あたしは素に戻った。あーゆー喋りは堅苦しくっていけねえや。どうも性に合わねえ。

「き、気味悪く笑うな・・・」

にへらーと笑ってたらしいあたしの顔を見ながらそいつは顔をしかめた。

そういえば、結局こいつをどう呼べばいいんだろーか。陛下じゃいくらなんでも仰々しいし、それにその辺で迂闊にでっけー声で呼ぶわけにもいかないし。

「えーと、あたしのコトは気軽に『なる』とでも呼んでーな。言いやすいっしょ？」

び、と親指を自分に向けてあたしは言った。そして、相手から返事が来る前に先手必勝。

「今の時代陛下なんて言ったら人格疑われるから陛下って言わんからね。それと言仁って言いにくいかたときーって呼ぶから」

もちろん人格が疑われるなんてんなこたあない。これは誇大表現であり、まあ確かにウソっっちゃウソだけど・・・ほら、ウソも方便、つてね。

「・・・ときー？」

ああ、そんなイヤソーな顔をしないでおくれ。

「と、き、ひ、と、だしょ？んだからときー。あだ名よあだ名」

ふははと笑ってあたしはそいつ　ときーのあたまをぐしゃりとなでた。すぐにとつきーがでかい声で抗議してきたのは言つまでもない。

## 帖之四：旅は道連れ

「やー、世話になったなーおっちゃん」

「いやいや、お客さんやけん当然やって」

色々あつたけど、チエツクアウト・・・ん？この言い方は民宿に当てはまるんか？まあいいか。うん、とにかくあたしは出発することにした。した、っつーよりなつたつて言つたほうが正しいかもしれないけど。元々一泊の予定で入れてたし。

「氣イつけやー」

「おっさー！」

手を振るおっちゃんに、あたしはぐつとサムズアップして踵を返し、トタン屋根の自転車置き場に停めておいた我が愛車二号機ヨリミチの元へとはせ参じる。

「・・・だからじつと待つてろつて言つたやろーがスカポーターン！」

「はうつ？！」

知らない人のチャリを興味深そうに弄つていたときーの頭へ入魂一発。

「何をするのじゃばかもの！」

「せからしか！ちよつとの間も待てへんねんかおんどりや！」

おっちゃんに挨拶をするためにとつきーに愛車を任せてここを離れたのは数分前。犬でもこれくらいは待てるっつーのに、まったくガマンの足りないお子様め。氏より育ちとはよく言った。

「その方は朕をなんと心得るっ？！」

「・・・あのなあ。あたしやお前さんを心配するから触るなつて言つたんやぞ？」

「・・・む」

そうなのだ。みんな子供の頃に仰山言われたやろつ？停車してたつてチャリは危ないときは危ないのだ。タイヤを回転させて遊んで

いようもんならそこに指を突っ込んでちょん切れたなんて話だつてあるんやで。

「とつきーの時代はないもんばっかなんやで。それが何かわからんのにてきとーに触ってケガしようもんならあたしやどないすりやええねん？」

「……」

だんまりか。まあ元天皇　上皇？　なんて身分上、きつと叱られたことなんてほとんどないんだろ。うな。ってか、この子の時代って戦乱に続く戦乱でろくに教育も行き届いてねーんじゃないかねえ。

「……すまぬ」

「ん。わかりやーええって、わかりや」

ぐしぐし。無造作になでるあたしをとつきーは恨めしそうに見上げていた。

なでながらふと思った。確かに時代は違うけど、この髪型はちょっとねえよなあ……。坊ちゃん刈りの進化前みたい。もうちょっと髪型なんとかならんだらうか。せつかくかわいいツラしてんだ、活かさない手はねえ。

「……よっしや。んじゃま、とりあえず行こか」

「うむ」

がしゃんとヨリミチのスタンドを蹴ってあたしはサドルにまたがる。

いつか言ったけど、我が愛車ヨリミチ　二度目だけどこいつは二号機　は折りたたみ自転車。小さい小さい。とは言っても、あれば便利だろうと思って荷台つきの折りたたみにしといて正解だったかもしない。

「よっしや、とつきー後ろに乗れ」

「……うしろ？」

「んあ。ほれ、後ろに台あるっしょ？うん、ここに乗っとくれ」

「……ん。……しょ、これでよいのか？」

よじよじとあたしの背中を支えにして彼は荷台に登った。そして高くなつた視線をもてあましてるように、きよどきよどと周りに視線を泳がせる。

「うい。んじゃ、すっかりあたしにつかまってるよ！」

「?う、うむ・・・ひゃわっ?!」

とつきーの返事を待たずに、あたしはぎっこん、とペダルをこぎ始めた。げ、さすがに折りたたみで二人乗りは結構キビシイな・・・重いじゃねえかコンチクショウ。

「こ、これなる! しっかりせぬか！」

「うっせー! これでもやるだけやっとなるわーい！」

いくら客が軽いとはいえ、やっぱりバランスが取りづらくってヨリミチはふらつきながら民宿をあとしたのであった。

風を切つてあたしらを乗せたヨリミチがアスファルトの道を駆ける。その風はほんのりとした潮の香りがあつて、やっぱしなんだかんだでこうやって走るの楽しいなあと思う瞬間だ。

あ、二人乗り独特のバランスの悪さはスピードを出すことである程度解決した。まあ安定性についてもう一声欲しいトコだけど、これくらいはしゃーないさ。

「おお・・・！」

ほう、つて感じの溜め息が後ろから聞こえてきた。言うまでもなく、とつきーだ。

「どーよ? これが『じてんしゃ』っつーもんだに」

「じてんしゃ・・・」

後ろで感嘆しきりのとつきーは、同時に周りのものにも興味津々だ。うん、こりやもう当然のことだわな。つってもこのド田舎じゃ、道路を疾走する現代最大といつてもいっくらの移動道具の最先端、自動車は今のところ通ってくれないのでそのリアクションは思ったよりかは控えめ。

いや、めっちゃくちや驚いて転倒でもされたらたまったもんじゃないからどつちかってゆーと来てほしくないけどな。あと、文明の利器移動道具の部三つ巴の一つ、飛行機もできれば遠慮願いたい。鳥だ、飛行機だ、スーパーマンだ・・・なーんてことはもちろんないわな。なったらあたしもびっくりだ。

「のう、なる」

「んー？」

こいつから話しかけてくるなんて珍しいな。どうしたい。

「どこへ行くのじゃ？」

おおう、こりや確かにもっともな質問かもしれないな。行くって言っときながら目的地は一切言っただけだったもんなあ。だからひとまず言っただけ。

「あたしんちだけど？」

「・・・」

「んだ、不満か？そりや確かに狭えトコだけだよ・・・」

「・・・京に帰りたい」

「へあ？」

また随分と唐突な。京って、平安京の京都だよな。平城京の奈良なんてことはいくらなんでもないよな。まさかの長岡京とかだったりしたら張り倒すぞ。

「そーかー、京都はふるさとだもんなー。もしかしたら見慣れたもんもいくつが残ってるかもしれんしなあ」

どこの『京』か確認することなく、あたしはそれを京都だと断定することにした。どうせあれから千年くらい経ってんだ、仮に間違ってたって時代が違うってことで万事解決よ。

「のう、京はどうなっておる？朕は今の京を見たいぞ」

まったくこりや無理なこと言ってくれちゃって。いやま、別に無理じゃない・・・っていつかむしる最終的な目的地だったりするんだけどさ。だって・・・

「なーにだいじょぶだって。あたしんちは京都にあるんだ、すぐに

行くよかゆっくりまったり行こうや。道中色んなもん見せてやるよ」

「まことか？」

「ウソは言わねーって。美味いもんとか珍しいもんとか、まあ期待しとけ」

「うん！」

お？今、うん、つつたか？大時代な口調はやっぱ体裁とかそいうので、根はふつーの子供なんかねえ。ちょっと新しいトコを見た気がするなあ。

## 帖之五：百聞は一見に如かず

遂にこの文明の利器と雌雄を決する時が来たようだ。そいつは後  
ろから猛スピードでやってきて、あつという間にあたしらを追い越  
して向こうのほうへ消えていく。

「なる！なる！物の怪じゃ！物の怪がおる！」

「ぎゃー！わかった、わかったから暴れんな！倒れる、ぶっ倒れっ  
から！」

そして悲劇はやってきた。後ろで暴れるとつきーのせいでバラ  
スは崩れに崩れ、今までなんとか走っていたヨリミチはどがっし  
ゃーんとちよいとばかり間抜けな音を響かせながら盛大に横転した。  
ざっけんじゃねーぞこのドアホウ。

アスファルトに転がるあたしとつきーとヨリミチ。ヨリミチは  
カラカラともの悲しい音を立てて車輪を回してたけどそのうちそれ  
も止まった。

「……だから暴れんなって言うたやないか……」

「……」

いや、取り乱すのもわからんでもないねんよ。平安時代からして  
みれば自動車なんてそりやもうバケモン以外の何物でもないだろう  
し。……それはわかるんだけどねえ……こっちとしてはそれで  
も勘弁。

「おー……痛え……」

身体の節々が傷みやがる。これが筋肉痛だつてんならどんなに気  
が楽かね。けど生憎とそんな軽いもんじゃあ断じてない。見てみり  
やあちこちをすりむいていた。くそつ、久々に転んだぜ。

「おーい、大丈夫かよ？」

とつきーが、さつきから反応がない。やべえ、まさか気絶したか？

「……だいじょうぶじゃ……」

すさまじくトーンの低い声で答えながら、とつきーはのろのろと

起き上がった。ああもう、せつかくのおニューな服が既に泥まみれ！  
って、言ってる場合じゃねーや。あたしとリュックがクッション  
になったからかあんまし目立ったケガはないみただけど、それで  
もやっぱし色んなトコをすりむいたりしてる。

「あーあ、お互いズタボロやなー」

「いたい・・・」

「ま、そだろーな。ちょっとくら待つとれ」

言いながらあたしは、リュックのチャックを開けて中をあさる。  
中にや色んなもんが入ってる。着替えとかタオル　昨日使ったや  
つで、おっちゃんが手際よく洗ってくれた　とかの類は当然とし  
て、なぜか入ってる筆記道具とか、二つに分けた財布の片方とか。

「あれ？おっかしーな・・・どこに・・・あ、あつたあつた」

そんな色々詰め込んだリュックから、あたしは小さい白ボトルと  
ミイラの普段着をぶち込んである小さめのビニール袋を取り出した。  
「・・・？」

とつきーはもうこのビニール袋そのものが気になるらしい。けど  
とりあえずそれは後回しだ。あたしは袋から中に入れておいたブツ  
を引っ張り出す。ついでにボトルを振って中身を確認。うん、ちゃ  
んとあるな。あんま残ってないけど。

「ちーとばかり染みるけど、ガマンしろよ？」

ガーゼに消毒液をぶっかけて、あたしは言う。言われた当の本人  
はあたしの行動が理解できていないらしいけど。

「し・・・む？ひう・・・ッ？！」

傷口の汚れをひとまず落とすために消毒液を染みこませたガーゼ  
を患部に当てる。その瞬間、その痛烈な感覚にとつきーは身を縮め  
て飛びのいた。うん・・・まあすっげーその気持ちはわかるけどな  
「な、な、な、な・・・！」

「だいじょぶだって、確かに痛えけどこれは消毒って言ってな、傷  
口から悪いもんが入らんようにするもんなんだって」

果たしてこういう説明が通じるんだらうか・・・。とりあえず、

害意があつてしてるわけじゃないってことだけでも理解してくれる  
といいんだがなあ。

「ま、まことじゃろうなっ、そのほう、朕を謀っておるのではな  
かろうなっ?!」

「だからだいいじょうぶだっつーに……。あたしの目を見れ!この  
透き通った真実の瞳を見れ!」

「……………」

わりと冗談のつもりだったのにマジで見つめられると困るな。む  
しろ流して欲しかったんだけど、まあいいか。

「な?信じれつて。痛いのは最初だけだからよー」

あたしはそう言つて、自分を親指で指してにかつと笑つた。

「……………わかつた……………」

ようやく納得してくれたらしい。やれやれ、相変わらず世話が焼  
けるぜ。

「んじゃ、ガマンしろよー?」

言いながらあたしはそつとガーゼで患部をぬぐう。

「あう……………つ、うう……………」

歯を食いしばつて、とつきーはあたしにしがみついてきた。がん  
ばつてるなー。泣かないだけ十分偉いぞー。

「こんなもんかな。あとは……………」

キレイになつた患部に、あたしはリュックのポッケから取り出し  
たバンソーコを貼り付けて、ぺしんと叩く。

「よっしや、これで終わり。よくできました」

「お……………終わったのじゃな……………」

今まで呼吸を止めてたのか、とつきーは重いため息をはきながら  
肩の力を抜いた。あ、半泣き。

「ん、終わり終わり……………んだ?泣きそつなツラしてんな?」

「な、泣いておらぬ!」

あーもう、なんでこの子はこついちいち面白いリアクションをし  
てくれるかね。いじりがいがあるつてもんだぜ。

って、あたしも随分汚れてるな……。誰のせいなんだかまったく。

脳裏をよぎった親友　悪友って言ったほうがいいかしらんの映像を振り払い、あたしはヨリミチを起こした。ごめんよ相棒、ずっと倒したままで辛かったろう。

「んじゃー、さっさと行こうや……。って、どしたん？」

ヨリミチを起こして振り返ると、とつきーは穴が開くほどじーつと傷口を眺めてた。

「どした、傷、痛むんか？」

「そ、そうではない」

「んじゃなんやねんな？」

「これはなんじゃ？」

出た。とつきーの『これはなんじゃ？』。

でも納得。要するにバンソーコが気になってしょうがないのな。

「んー。これはなー、『ばんそうこう』って言うんやぞ」

「ばんソーコー？」

「おう。こうやって傷口に貼っとくと、勝手に治してくれるねん」

「すごいものじゃのう……」

うわー、いまだきバンソーコでこんなに心の底から感動するやつなんざ誰もいねーぞ。

「まあどんなケガも治せるってわけじゃないけどな。軽いモンだけ」

「されど大層素晴らしいではないか。薬も進んでおるのじゃのう……」

「・」

「ま、どういう原理なんかはあたしも知らねーケドな」

さーて、先へ行こうかと思ったその矢先のコトだった。

また自動車　今度はいわゆる大型貨物自動車に分類される奴が通り過ぎていった。ありゃあ法定速度を越えてるな。死ねばいいのに。

「な、な、な、なる！また物の怪じゃ！それも、先のものより大きなぞ！」

「あー・・・見ちまったか・・・」

これから先、こうやって現代の物品を逐一説明しなきゃならんのか？そうなるか帰るのにどんだけかかるんだか・・・ってか、ちゃんと目標の日までに辿りつけっか？

先が思いやられるので、もうここは意地悪を仕掛けて遊んでやることをあたしの脳内議会は可決した。

「あれはな・・・『じどうしゃ』って妖怪やねん。韋駄天のごとき速さで人に襲い掛かる恐ろしいやつちゃわ！」

「げ、現代には妖怪があるのか?!」

これが漫画だったらバツクに『がびーん』って擬音語が出てくるんだろぅなってくらい、とつきーは素晴らしいリアクションを見せてくれた。ってかそんなマジに驚かれたらちよっち後ろめたいじゃないか・・・。

「おう。現代人の死因の中でもかなりの割合を占めとるのがあれやねん・・・あ、後ろから！」

「ひゃああっ?!」

あまりにタイミングよく向こうから車が来たもんだから、あたしは大げさにそつちを指差して叫んだ。

そうしたらもうビビりまくってあたしに抱きついてきた。しかもぎゅっと眼つぶって青ざめた顔して震えてやがる。なんだよ、お前可愛すぎるよ。今のガキどもにもこれくらいの純粹さのある奴なんていやしねえだろ。

「・・・くくつ、ははははは、あははははは！」

そして、あたしは遂にガマンできなくなって弾けるように笑い出した。周りに人がいたら、それはもう胡散臭いものを眺める眼で見つめてくれたらう。

「・・・?」

それはとつきーも同じで、何事だといわんばかりの視線をこつちに向けた。やべえ、そんな小動物みたいな眼で見るな、もっと笑えちまう。ギブギブ！ギブー！

「ひー、ひー……、ああもう、わりわり、もうとつきー可愛すぎるよ」

ああ、笑いすぎて涙が出たのなんてどれだけぶりだろう。ってか腹痛いよ、笑いすぎて腹筋が死ぬ！

「な、え、は？」

あたしの反応がまったく理解できてないみたいで、とつきーはおろろし始めた。よくわかんない言葉を発してる。

「いや……な、今の全部ウソな」

「……え？」

ちよ、そんなハトが豆鉄砲食らったみたいなのツラすんな！また笑いがぶり返しちゃうだろうが！

「いやだから。全部、ウソ」

とつきーはしばらくわからなかったみたいだけど、そのうち理解できたみたいですぐにボムが膨らむように顔を真っ赤にして怒り出しました。

「な、な、なるっ、その方っ！」

「いや、だから悪いって言ったやんか。ああもう、そんな顔すんなよ、もつと笑えて……じゃなくって、折角の顔が台無しだぞっ」「痴れ者っ！」

それだけ言うと、とつきーはふいとそっぽを向いた。どこまでお約束にオーバリアクションなんだお前は。

「……あー、一個だけウソじゃないもんがあったわ」

「……」

脈あり。興味なさそうにしてるけどどの部分がウソじゃないのかわりたくてたまらないってツラしてるぞ。こりゃあババ抜きとかさせたらカモれそうだ。

「名前だよ名前。あれが『じどーしゃ』って名前なのはホント。』くるま』って言い方もあるけどよ」

「……じどーしゃ？」

「おう。ちなみにな、さっき来たあの馬鹿でかいやつは車は車でも

『トラック』って奴な」

「とらつく・・・？」

「うんうん。あれらはな、現代人の乗り物やねん」

「・・・？空言を言うでない、牛も馬もいなかったではないか」

ああそうか、千年前の乗り物は牛車とかそんなんだな。そういう観点からすりゃあれは斬新すぎるんだろうな。

「いないよ。あれは人間が動かしてんだ」

「・・・？」

こいつはホントに感情を隠すつてコトを知らねーな。モロになんでつて顔しやがる。まあわかりやすくしていいけどさ。

「あれはなー、人間が中に入って動かしてるんだ。馬乗るときに乗ってる人は手綱握つて操るだろ？あれとおんなじだ」

「・・・な、中に・・・？」

「おう。んだ、なんなら後で乗るか？」

「え・・・い、や、無理せずともよいぞ・・・」

あー、ビビッてるビビッてる。そんなに怖いのか？

待てよ、こいつが車に乗ったことないのは当たり前だけど、そうなるも車酔いとかがそういうのも体験したことつてほとんどないんじゃない・・・。そうなるも迂闊に乗り物に乗せて吐かれでもしたらそれこそえらいことに・・・。

うん。決めた。乗せない。旅の仕方が仕方だから最後は絶対電車に乗らねばならんがそれまでは絶対乗せない。危ないことには近づかないにこしたことはないのだつ。

「まあなんだ。ここにこうやって突っ立っててもしやーないし、行くこうや」

「う、うむ」

そして再びヨリミチはあたしらを乗せて走り始める。

## 帖之六：武士は食わねど高楊枝

きゅるるるー、とヘンな音がした。

音の発生源はあたしのすぐ後ろ、恐らくは今もあたしにしがみついているこの小僧と考えて違いあるまい。

「・・・とつきー」

「なっ、なんじゃ？」

明らかに慌てた感じの声。いやそれはいいけどちよつとうるたえたくらいで動かんでくれ、ヨリミチがバランス崩しちまう。

まあ、朝がごたごたしてたしこの辺はしゃーないかもしれんなあ。もうお天道様もかなり高いトコに来てるし。

「腹減った？」

「そ、そのようなことはないぞっ」

強がりさんめ。だがそのようなことがあたしに通じると思わぬことだな！

「そう。あたしや腹減ったから飯食うけど、減ってないならなくてええな」

それだけ言っであたしはぷいと前を向く。

その瞬間、後ろからとつきーが揺さぶりかけてきやがった。

「な、なるっ、その方は本当につ！」

「やめるー！倒れる！倒れるからマジでやめる！」

ぐわんぐわん。ああ景色が揺れる。いや揺れてるのはあたしのほうか。

このままでは前のようにコケちまうのであたしは急ブレーキをかける。耳に残る独特な音を響かせて、ヨリミチが止まった。しばらくげえげえと荒かった息を整えてから、ゆっくり後ろへ振り返る。

「・・・こーの大バカがあー・・・」

「ごごご」と閻魔さまのようなオーラ 自称 を纏いつつ、あたしはとつきーをにらみつけた。それを見てまたなんか痛いことを

されると思ったのか、とつきーは顔をこわばらせてちょっと後ずさりする。

「な、なるが悪いのじゃぞっ！」

「なわけあるかいこのドアホがあー！」

「食らえ、必殺袈裟固めッ！」

「ぎゃあああー！！あああああつ、やめよやめよっ！」

「イヤだねッ！反省しやがれッ！」

「痛い、いたいいたいいたいー！！！」

悲鳴の中、あたしは一本が取れる時間分だけしっかり固め、そして解放する。

「・・・あ・・・う・・・」

固めるだけ固めたもんだから、ぐにゃんととつきーは脱力してその場に倒れこんだ。服が汚れちまうがもはやそんなことはどうでもいい。だってもうとつくに汚れまくってるもんねー！

「わははははは、これに懲りたら二度とそのような考えは起こさぬことだなっ！」

腕を組んで高笑い。満足！

「うう・・・そ、その方は・・・朕をなんと心得る・・・」

「迷子かな」

倒れこんだままの姿勢で目線だけこちらに向けてとつきーが言う。しかし今の時代天皇陛下を崇め奉る人間はほとんどいないのだよ！ましてや今上天皇でないなら余計な！

「うう・・・」

「・・・まあ、ちょっとやりすぎたような気はするわ、ごめんごめん」

「・・・反省・・・しておらぬじゃろっ・・・」

「まーな！」

笑顔でサムズアップ。

「・・・」

じとーっとした顔を向け、むくれながら起き上がるとつきー。ど

この駄々っ子だお前。ん？駄々っ子はあたしか？まいいや。

「ああもつ、そんな顔すんなって！ほれ、飯食おうぜ！現代の飯！」  
あたしはぺしぺしとその背中をたたいて立ち上がるようにうながす。まあ問題はこの近辺に飯屋どころか家一軒、人っ子一人見当たらないってことなただけだな！

「・・・う、うむ・・・は、腹が減っては何もできぬからのう」

あ、なんだかんだでやつぱし腹減ってたんだな。最初っから素直にそう言えばいいのにな。素直じゃねーんだからまったく。ま、その辺がまたおもしろ・・・じゃない、可愛いんだけど。

さて、それはともかくまず飯屋を見つけねば。出来るだけこいつが騒ぎそうなブツが置いてないところがいいんだが・・・それはちいとばかり無理がある話なんだよなあ。一番無難なのはまあファミレスだろうけど・・・。

「あ、そーだ。とつきー、お前どんなのが食いたい？」

「な、なんでもよいのか？」

なんでもいいかとか聞かれるとちょっとためらっちゃうじゃないか・・・。

「おう、まあ、高いもんじゃなきゃなんでも来いや！」

そしてどんと胸を叩くあたし。あたしも見栄っ張りかねえ。

「う・・・うーむ・・・」

「ま、選択肢ありすぎっか。んじゃま、とりあえずここにいてもしやーないし移動しようぜ」

「わ、わかった」

そして何度目かわからない発進をしたヨリミチ。

しっかし、いくらなんでも前途多難すぎるやろ・・・家に帰るまでにあたしや何回コケりやいいんかね。もうちつとスムーズに行動できんもんか・・・まあそれはどだい無理な話なんやろうけど。

「・・・」

。。。。

「。。。。。。」

。。。。。。。

「。。。。のう。。。。」

「。。。。んだよ」

「。。。。まだ着かぬのか。。。。？」

「。。。。んだな。。。。もうちつと待ってくれや」

「。。。。うむ。。。。」

まあ、なんだ。

店がねえッ！

どんだけ何もなけりや気が済むんだよっ?!道路だけか、道路だけなのか?!日本政府は旅行者に対する兵站業務を怠っているというのか?!あたしは革命を決意した!

ってか、あたしもいい加減腹減ってきた。これはやばい、餓死フラグがピンピン立ってる。なんとかせねば。。。。

こうなれば仕方ない、当初のコースからは外れるがわき道に入るしかあるまい。というわけで一端別の道に入る。

少し中に入ればきつと。。。。きつと。。。。

。。。。。。。

なーにーもーねえーッ!

なめてんの?!この国はもう終わりだッ!

腹が減ってるってのにあたしはヨリミチをこぐ足を止めるわけには行かない。止めたら動きも止まるし。だのにちつとも食事ができる場所が出てきやがりやしねえ。ふざけやが。。。。ってちょ、ま、こんな空腹状態で上り坂とな?!

死ねばいいのに。。。。どうやらこの国のすべてがあたしを滅ぼしにかかっているらしい。国民に優しい政治はないのか?!

「なる。。。。」

「。。。。言うな。。。。ぜえはー。。。。あたしだって。。。。わかつとるわあー。。。。ッ!」

上り坂を走るヨリミチの速度はあたしのエネルギー残量と比例して遅くなっていく。ついでに後ろに普段ならないもんがのっかってるわけで、速度が落ちるのは普段よりも当然ブツギリで早い。

坂の終わりが天国の扉に見えるぜ・・・ああ、ラーメンって文字が天国に見える・・・って、ちよつと待て。

え、ラーメン？まさか、慌てるなこれは孔明の罠だ・・・。

・・・。

「あつたー！！」

「うわあつ？！い、いきなり叫ぶでない！」

後ろからなんか聞こえるけどそんなことはもはやどうでもいい。

地獄の上り坂を登りきったそこにはなんとラーメン屋があったのだ。人生苦あれば楽ありだな！っしやあ、がぜんパワーが湧いてきたぜ！

ありあまるラーメン欲をすべてヨリミチをこぐエネルギーに変換！全速前進だ！

「わああああー？！な・・・なる・・・っ、はや・・・！」

そしてあたしは風になった。

## 帖之七：毒を食らわば皿まで

「いらつしゃいませー」

思いつき扉を開け放つて中に入ったあたしに来る、店員さんの定番。次に来るセリフはまるっとお見通しだぜ！というわけであたしは人差し指と中指を立てて、ピースサインを見せる。

「二人ね？あいよ、こっちなー」  
ふっ、勝つたぜ。

「はい、お水とメニューねー。」

おばちゃんの店員さんが、あんま広くない店で唯一の座敷席に着いたあたしらにお冷とメニューを差し出した。・・・なんかメニュー結構汚れてんなあー。まあしょうがないかね。

「よーよー、とつきーどれにするよ？」

あたしはメニューを広げてとつきーに見せる。

「・・・」

「？おーいどしたー？」

よく見たら、とつきーはぐったりしてた。一体何が・・・これは孔明のワナか？！

「だ、だいじょぶか？」

「・・・誰のせいじゃと思っておる・・・」

「あれか、あたしの知らん間に狼藉モノが・・・」

「なるが急に速くするからじゃ、この痴れ者！」

なに、あたしのせいとな？！

・・・いや、まあでも。

「なんだ元気じゃん」

「う・・・。お、お主、本当に覚えておれよっ」

むすつとした顔を見ると、とつきーはメニューに食らいついた。

大分薄汚れてるメニューに書かれてる内容は、あたしからは反対になつてるけど、ま基本的に一般的なものだから大体どんなのがある

かはあたしにゃわかる。

「……………」

ああそうだ、とつきーにはわからないか。

「とつきー、どれがどゆのか多分わからんやろ？」

「……………」

そのヘルプアイはあれだな、そんなことはないと言いたいけど、その通りだから言えないってことだな？よっしゃ、あたしに任じときな。

「とりあえず、いつちばん普通のやつでええよな？」

「うー……………そうじゃな、そちに任せる」

「あいよ、りょーかい。……すいませーん」

とつきーの了解を得たのであたしはおばちゃんを呼ぶ。他に客がないせいで、おばちゃんははいはいとか言いながらすぐにこっちに来てくれた。迅速な対応だね！

「チャーハン定食とラーメン一つずつで」

「チャーハン定食にラーメンねー。ちょっと待ってっつてねー」

さらさらつと紙になんかを書き込んで、それから大声でもっかい注文を言いながらおばちゃんは厨房に入ってしまった。きつと夫婦でやっているとさゆことなだろーな。

ところで、腹が減って腹が減ってしょうがないんだがどれくらいで出てくるでしょうか。

「のう……………」

「ん？」

「ちやあはんていしょくにはあめんとはなんじゃ？」

ああそうか、そういう説明をしなけりゃならんだな。そうだよなあー、平安時代にやチャーハンもラーメンもあるわけないわな。

「んーつと……………どういえばいいかなー」

くいつと水を飲みながら、あたしは頭をかいた。チャーハンはまだともかく、ラーメンって具体的にどんなかって説明すんの、改めて考えるとすっげーむずいなア。

「どつちも中華料理なんだけどさ、チャーハンはあれよ、焼き飯つてヤツ。んで定食つてのは・・・えーっと・・・」

うん、定食の説明もむずい。これは難題だ。すきつ腹で頭にエネルギーが足りないこの状態じゃ厳しいもんがあるぜ。

ああもつ、色々とめんどくせえ！

「まあ、とにかく頼んだのが来るまで待つとれ。そつちのほつが多分早いわ」

「う・・・うむ・・・」

見える・・・あたしには見えるぜ、とつきーの頭上に浮かぶたくさんのハテナマークが！

それにしてもなんだなー、意外と知ってるものがどういうものか知らないもんだなあ・・・。

「・・・のう、この水は飲んででもよいのか？」

「ん？ああ、これ？つたりめーよ、じゃなかつたらあたし飲んでないって」

言いながら、もつかい水を飲む。ああ、腹減つてるときって水でも十分うまく感じるなあ。

「そうなのか・・・」

言いながら、とつきーは恐る恐るコップを取った。そいでもって透明なプラスチックのコップをしげしげと眺めてる。ですよねー、そんなのここ数十年くらいになって出てきたもんですよねー。

でもこつちから説明しようとするとうまい説明なんてできやしなしいし、そもそも説明してもわかつてくれそうにないから何も言わないうぜ。つてか、プラスチックなんて石油から出来てることくらいしか知らないし。

「・・・・・・」

そんなおっかなびっくり飲まんでもええやんか、別に悪いもんなんて入つとらんっつーに。

「・・・うむ」

「うまいだろ」

「う、うむ、悪くない」

そういや昔に比べて水ってどうなってるーな。まあでも、最近はナント力還元水みたいなもんもあるし、昔の水のほうがうまいなんてことは簡単にや言えないんじゃないかなーとも思うわけなんだが。

ま、とりあえず今はこの水が空腹に染みるぜ！早く来ないかな、飯。

「あいよ、ラーメンお待ち」

あたしの飯はまだですかそうですか。ちくしょう、一生恨んでやる。

「……………」

「……………どうしたんだ」

やってきたラーメンをじーっと凝視してるときー。そんなか、そんなにこれが珍しいか？！いや、珍しいんだろうケド、そんなに見んでもええやん！

「……………これは食べるのか……………」

「食えないもん出してどうすんだよ？」

「……………」

「あいよ、箸！」

いつまでも食べようとしないので、こりゃ埒が明かんとあたしは箸を突き出した。麺類はなー、ふやけてからじゃ遅いんだぞー！

「う、うむ……………?」

渡されたものをしげしげと見つめてやっぱりハテナマークを浮かべるとつきー。待て、まさか、まさかだよな？まさかとは思うが！

「割り箸も説明せにやならんのか……………」

「……………わりばし、とはなんじゃ？」

「凶星だった！」

「……………わかった、わかったから、黙ってそれ貸しな」



べることでしょう。

「ずずー、ずずー、と麺をすすする音が響く。これ外国でやったらマナー違反らしいんだよなあ……。あたしゃこうでもしないと麺類を食ってるって気がしないよ。ってか、フォークとか使えません。あれは突き刺す専門だろ、常識的に考えて。」

ちなみに、ラーメン自体はごくごく普通のしょうゆ味。どっか懐かしい感じの、っていえばいいのかな。多分味付けに特別なもんはないし、ごくごく平凡なもんだらうけど、すごく……。おいしいです。腹が減ってる時はなんでもうまいもんだねー、いやはや。」「……。あー、うめえ」

多分、このタイムは新記録だ。こんだけ早く食いきったのは初めてだろう。さてチャーハンをやっつけようか。

そう思ったものの向かいがすごく静かなので様子を見てみると、ラーメン相手に悪戦苦闘してるとつきーがいた。ちよつと待てよ、もしかして麺類って平安時代にはないのか？

「っつーか、問題はそこじゃねえ。うまく食べられないせいでスーブがハネまくってる。いくらなんでも折角の服が台無しすぎるだろ、それは！コケたせいで汚れてるけど、一応新品だぞそれ！」

「あーあーあー、もう、しょうがないなー」  
あたしもあんまし箸裁きは上手いほうじゃないとは思うけど、これはひどい。見るに見かねて、あたしは食わせてやるうとした。・・・が。

「よい！朕は一人で食べるのじゃ！」

お盆ごと抱えちまいやがった。負けず嫌いは至極結構でござんすよ、でもね？それ以上汚されるとこっちが困るんすよ？

「うー、あー、うー」

遂にあたしから離れて食い始めやがった。そんなにイヤか？……。まあいつか、チャーハン冷めるし。とつと食っちまわあ。

ラーメンと同じく、チャーハンも別段どーってことない、どこでも見かける感じのヤツだ。ただちよいと刻んだチャーシューが入っ

てるかな、これは？

レンゲですくって一口。うん、うまい。なんで店で出てくるチャーハンで家で作るやつよりうまいかね？やっぱあのバカでかい鍋で作ると変わってくるもんだろーか？

まああたしのチャーハンが微妙なのは、冷蔵庫の中にちよこちよこ余った野菜と冷やご飯を一掃するときには作らないせいで米粒より野菜が圧倒的に多くなるってのもあるんだろーケドさ。料理できるんだ、っていう話は受け付けない。これでも一応できますとも、ええ、できますとも。

あたしがチャーハンを食べ終わっても、とつきーはまだラーメンと格闘していた。スープのハネ具合はさっきよりも明らかに悪化してて、おまけにいい加減でそろそろ麺がのびてそう。でも、とつきーのヤツ、なんか楽しげだ。

「・・・おいしいかー？」

頬杖をつきながら聞いてみた。

「うん！」

・・・満面の笑みすか、そうすか。それならまあ、もはや何も言うまい。食い終わるまで待っててやるよ。

ちらっと時計を見てみれば、そろそろ一時半辺りだった。ま、一応今日の宿には問題なく着くでしょーよ。急がば回れとか言っしよ。

## 帖之八：亡羊補牢

「よお、満ち足りたかよ？」

店から出ながら聞いたものの、まあ満足そうな顔してるから聞くまでもないんだろうけどさ。

「うむ、美味じゃった」

「そうかい、そりゃよかった」

「ラーメン、じゃったな。うむ、覚えたぞ」

「ただラーメンが気に入ったんだ。いや確かにうまいのは認めるしあたしも大好きだけど、ラーメンはそうそう何度も食うもんじゃねーぞ。あんまし食いすぎると身体によくない、たまに食うからうまいんであって・・・。」

「これなる、何をぼうとしておるのじゃ、早う参るぞ」

「えあ？お、おう」

「あたしがぶつぶつしてたらとっきーの音が飛んできた。見たら、もうヨリミチの後ろに足をかけてる。なんだ、エネルギー補給が完了してパワー全開ってか？」

「適当に生返事だけしといて、あたしはヨリミチにまたがった。」

「んじゃ行くぜー、飛ばすからしっかりつかまってるな！」

「んむ！」

「ぎっこん、と音を立ててヨリミチが走り出す。もちろんさっきの道は上りだったから、そこを戻るといふことは下るってこと。みるみるうちに速度がついて無事元の道にリカバリー。当初の予定通りその道を駅に向かうのだ。」

「とは言っても、駅まではだいぶ距離がある。後ろにいるとっきーはどんくらいだろう、あんまし重くないだろうけどやっぱり一人後ろにいるってだけで結構スピードが違うもんなんだなあ。こりゃちょっと遅くなるかも。」

「ってーか、どっちみち今日中に電車に乗るのは不可能だという予

定で動いてるから駅に着いても今日は近くのビジネスホテルで一泊するつもりなただけ。

あれ、ちよつと待てよ？元々あたし一人で旅してる予定だったはず、それが二人になってるってことは宿泊代のほうは一体いくらになつて……。

……うん、この問題は棚に上げとこう。そんな時考えればいいや。道路脇を走つてしばらく、だだっ広い交差点に到着。交差点つて言つても信号のない、ただの田舎道。えーっと、これはどっちに行けばいいのかな。

「とつきー、あたしのリュックから地図出してくんね？」

「む、地図？」

「そそ。リュック中のどっかにあつからさ」

「……何ゆえ朕がそのようなことをせねばならぬのじゃ」

えー、お前ここで天皇風を吹かせるかよ？

「別にいいじゃんかよー、リュックいちいち下ろすのめんどいんだつてばさ」

「……まったく仕方のない……感謝するのじゃぞっ」

「さんきゅー」

ひらひらと手を振りながら返したあたしに対して、とつきーがじいじいとリュックのチャックを開ける音がすぐ後ろから聞こえてくる。それから中身をこそこそしてる気配がして、気配がして、気配がするだけで……。

……え、そんな手間取るようなことか？

「……とつきー？」

「す、少しは待てぬのか、そちはっ」

いやあの、もう大分待ったと思うんですけど。おかしいなあ、別に中そこまでごちゃごちゃしてなかったはずだけど。

「……なる……これでよいのか……？」

とつても不安げに、とつきーは何かをあたしに差し出した。

受け取ってみれば、それはちゃんと地図だった。なんだ、別にわ

からないとかそんなんじゃないじゃん。ああまあ、確かに昔のと比べると最近の地図はレベル高いかもわからんけど。

「おう、これだこれ。ん、ありがとなー」

「こ、これ、何をするかっ」

なでなで。荷台に戻ったとつきーが不服そうにあたしの手をはねのけた。やいやい、別にいいだろーが、そんな嫌がらずともー。

「えーっと・・・今が、ここで・・・駅、が、ここ・・・だから・・・」

この辺りの地図が載ってるページを開いて現在地を確認。そこから駅を探し求めて指を紙の上でスライドさせる。そいでもってどっちの方向に行けばいいのかを考えてみる。

「・・・ん、ここは右に行けばええねんな。よっしゃ。あ、とつきー、地図またしまつといてー」

「人使いが荒いのう・・・」

ぶつぶつ言いながらもちちゃんと地図をしまつてくれたとつきー。いい子いい子。

「うい、そんじゃ行くぜー。とつきー」

「ん、なんじゃ？」

「これから街のほうに向かうんだけどさ、心構えはだいじよぶか？」

「く、くるまのようなものがたくさんあるのか？」

露骨に不安そうな顔するなよう、こいつう。

「まあ、色々あるな」

にしし、とあたしは意地悪く笑ってみせる。そしたらまゆ毛を八の字にして口をへ字にして、なんとも情けない顔をする。おいおいおい、大丈夫だっつーのに。

「ま、だから間違ってもあたしから離れんなよ？」

「わ、わかつたっ」

すげえ勢いで首を縦に振るとつきー。お前は小動物か？

「うーし、んじゃ改めて、行つくぜー！」

そう言っつて右折し始めた瞬間。

ぶわあっ、バサッ、

「ひゃわああ?!」

どしゃああ。

得体の知れない音が後ろから響いてきた。

「なんだなんだ、どうした?!」

慌てて急ブレーキ一つ、振り返ってみればアスファルトにしりもちをついてるとつきー。ちよつと横に離れたところに地図が落ちて、風にあおられてページがパラパラと流れまくってた。

オーケーちよつと待て、これはどういう事態だ?何が起こった?とりあえず……。

「と、とつきーだいじょぶか?立てるか?」

「……だいじょぶじゃ……うう……」

涙目。うん、まあ声出して泣かないだけ偉いぞ。

ひとまずとつきーを立たせてズボンについた汚れをパンパンと払う。……なんというか、上下共に新品としては同情したくなるほど悲惨な目にあってるような気がするな……コインランドリー探さないとなあ。

「……もしかしてアレか?地図しまったとき、チャックしめてなかった?」

地図を回収しつつリュックを下ろしてみると、ジッパーが開きっぱになってた。これか、下手人は。

こくと頷くとつきー。なるほど、把握した。

「あー、なるほどな。ん、わり、説明しなかったあたしのミスやな」  
地図をリュックにしまって、じい、とチャックを閉じるところを見せる。

「これは中のもんが出ないようにするためのもんなんよ。開けたら閉める。わかった?」

こくと。

「……なんか妙にしおらしくなったな?まあいいか、騒いだりするよりかは。」

「よし、じゃあテイクスリー、行くぜー」

リュック背負ってヨリミチにまたがり、とっきーの搭乗を確認して今度こそ本当に右折する。

やーれやれ、なんか妙に疲れたぜ……。

じいじい……。

「……………」

ちよつと待て。なんでその音が今聞こえるんだ。

「……………」

よし、待て！

「とっきいー！」

急ブレーキ閃、リュック越しにあたしに追突したとっきーに振り返ると、リュックのジッパで遊んでたとっきーと思いつき目が合う。

「あ……い、いや、これはその……」

「問答無用じゃあ……」

ぼきぼき、と指の骨を鳴らしながらとっきーに迫る。へびに睨まれたカエルって状態のとっきーは、ちつとも動かない。

「お前はあたしに人身事故を起こさせたいのかああああー！！」

「ぎゃああああー?!」

昼下がりのうらかな青空に、とっきーの悲鳴が響きましたとき。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7823b/>

---

拾いもの陛下！

2010年10月9日00時41分発行